

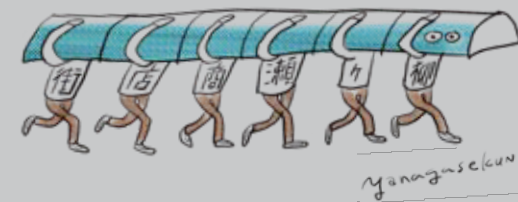
G I E U C I T Y

R E V I T A L I Z A T I O N

through

R E N O V A T I O N

G U I D E B O O K



岐 阜 市

リノベーションまちづくり

ガイドブック



YANAGASE AREA RENOVATION

約150店が新たに誕生！

まちが大きく動き始めています。

柳ヶ瀬周辺エリアが、元気になってきた。そう感じたことはありませんか？ 実は2014年から2021年に、約150店舗※がこのエリアに新規出店しています。誰のどんな行動が、この盛り上がりを支えているのでしょうか。2014年から始まった、柳ヶ瀬のリノベーションまちづくり。その流れを、当事者の言葉とともに振り返っていきましょう。

※ 2021.6月時点 金華橋通り、金宝町通り、御貺街道、若宮町通りに囲まれた約28haのエリア内（岐阜市にぎわいまち公社調べ）

サンデービルディングマーケット

【2014年～】



SUNDAY BUILDING MARKET

手作りやこだわりなど顔の見える買い物体験をライフスタイルを切り口に展開し、若い世代の新たな客層を呼び込むことに成功。毎月第3日曜日に開かれ、来街者5,000人規模、出店数は150を超え商店街の変化を象徴するイベントとなった。

【POINT】

- まちの新しいファンづくり
- 小さな起業を応援する
- 道路空間のお試しづかい



サンビルから波及した取り組み



■ ロイヤル40（ヨンマル）

築40年のビルを再生し、2017年にオープン。こだわりのショップやアトリエなどが集まるビルは、柳ヶ瀬の新名所となっている。



■ マルイチビル

柳ヶ瀬を楽しいまちにする(株)が、老舗の喫茶店を営むオーナーからビルを継承。喫茶店、ギャラリーなどが2019年にオープンした。



■ サンビル／蚤の市

商店街にある古道具mokkumokkuさんが企画した新しいコンテンツ。古道具に特化し、若い男性など新たな客層を呼び込んでいる。



■ yanagase COFFEE COUNTER

サンビルを通じて商店街に可能性を感じた出店者とまち会社が共同で開催するイベント。コーヒーをキーワードに新たな集客や話題を生んだ。

Story of YANAGASE Area

部にまでこだわりを注ぎ、若いお客さんが集まるおしゃれなマーケットであることを印象づけた。そうした地道な準備が実を結び、2014年9月の第1回サンビルは期待通りの客層を集めることに成功したのである。普段人通りの少ない商店街が若いお客さんで埋め尽くされる光景を、まちの人たちは驚きを持って受け止めた。エリアの再生につながる第一歩を踏み出したサンビルに、商店街の人たちはどんな期待を寄せたのだろうか。

「私たちが期待したのは、サンビルが新規出店者のリクルーティングの場になることです。

そのためには、若い出店者さんと若いお客さんのどちらか一方だけを

「柳ヶ瀬が、
『何かを始める場所』であってほしい」



林 亨一さん

岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会 理事長。柳ヶ瀬商店街の活性化や空き店舗活用に取り組む。

集めるのではなく、両方の人を同時に集める必要があります。サンビルが両者のマッチングの場として機能し、商店街への新規出店につながることを期待しました」

そう話すのは、岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会（以下、柳商連）理事長の林亨一さんだ。「昭和41年生まれで、柳ヶ瀬ブルースと同年」という林さんは、このまちの移り変わりを長年見つめてきた。

「柳ヶ瀬を長く支えた店主さんたちは、自分の子どもを育て、社会に送り出した後、今は住民としてこのまちで暮らしています。つまり、自分の人生をしっかりと生き抜いた人たちなんです。結果として空き店舗が増えるのは自然なことで、それ自体に問題があるわけではありません。ただ、別の問題があります。それは岐阜市全体の問題で、若い人たちの働き方として個人事業主になるという道がないと、職業の選択肢が狭まって都会から岐阜市に戻ってくることが難しくなります。岐阜市に商売を立ち上げられる土壌があることが重要で、柳ヶ瀬こそがその場所だと思うんです。柳ヶ瀬が、『何かを始める場所』であってほしい。そして、そのきっか

けになるのがサンビルだと思います」

林さんの話から分かるのは、柳ヶ瀬エリアには商業地としての潜在的な可能性があり、その活性化は社会的な意味があるということだ。しかし、現実に新規出店者を集めることは容易ではなく、多くのハードルが存在する。そうした課題解決に取り組むために2016年12月に設立されたのが、後に岐阜市が都市再生推進法人に指定する「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社（以下、まち会社）」だ。最初のプロジェクトとして、「ロイヤル劇場ビル」の1・2階をリノベーションし、希望者にサブリースする事業が行われた。

「ロイヤル40」に出店したイラストレーター。

ロイヤル劇場ビルをリノベーションし、2017年10月にオープンした「ロイヤル40（ヨンマル）」。ここでワークショップスペース「ペンギンブーツプラス」を営むのが、すぎやま えみこさんだ。すぎやまさんは、美殿町で「まちビル」がスタートした時の入居者でもある。

「自分はこういうことが好きだったんだ、
という発見がありました」



すぎやま えみこさん

広告・雑誌のデザイナーを経て、フリーランスのイラストレーターとして独立。現在は、柳ヶ瀬のロイヤル40でワークショップスペース「ペンギンブーツプラス」を経営する。

「私は長い間自宅でイラストを描く仕事をしていましたが、まちビルに入居し、職業も年齢も違う人たちと同じ場所で働くことに楽しさを感じました。メンバーは皆、ここで小さな規模でスタートアップして、できることを少しずつ広げていきました」

すぎやまさん自身もその後、週末限定でテナントを集めた「ウィークエンドビルディングストアーズ」への出店などを経て、ロイヤル40に出店することを決めた。イラストレーターの仕事をしながら自分の店を出すという、大きなチャレンジ。そこにどんな思いがあったのだろうか。

リノベーションスクール@岐阜

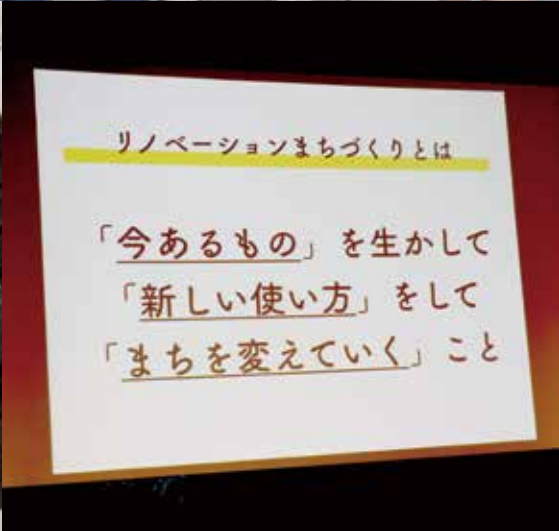
【2019年～】



使われていない店舗や空きビルなどの空間、歴史や文化などのまちの資源を活かし、新しい使い方でエリアの価値を向上させるビジネスプランを受講生がチームとなり立案。実際に不動産オーナー等へ提案する実践型のスクール。

【POINT】

- まちづくりの担い手の育成・創出
- 人や地域とのネットワーク
- リノベーションまちづくりの情報発信



リノベーションスクール修了生の取り組み



■ まめぐら／ミカヅキ

2019年のスクール修了生・おおのひよりさんが営む、作家物のうつわと喫茶の店。



■ ビエサン

2019年のスクール修了生の渡辺洋敬さんが起業した、ホットサンドのキッチンカー。「OPEN SPACE LABO IN 金公園」にも出店。



■ 岐路メシ

2020年のコンテンツ開発コースのユニットが提案した「みんなの沼 ぎふメディア コヌモノ」企画。岐路を支えた岐阜の味から人生を語るトークライブイベント。



■ 岐阜まち家守

町家などが残る旧岐阜町のエリアマネジメントを担うまちづくり会社。リノベーションスクールの修了生と地元の方等が出資し2021年に設立。

Story of YANAGASE Area

「初めてサンビルでワークショップをした時、お客さんが喜んでくれることがうれしくて、自分はこういうことが好きだったんだ、という発見がありました。そしてもう一つ気づいたのが、まちの案内役を務める楽しさです。店にいと、他の地域からお客さんが来られることがあります。そういう方に、『あそこにはいいお店がありますよ』みたいな話をするのが楽しかったです。ものを売る以前に、その『店番』が楽しかった。柳ヶ瀬を楽しんでいただくための、小さな入り口の役割を務めたいと思いました」

エリア再生に向けた機運の高まり。

少数の人から始まった、リノベーションまちづくりの動き。その中で、すぎやまさんのように、柳ヶ瀬エリアで何かを始める人が増えてきた。しかし、まち全体の課題解決をプロジェクトの当事者だけが担うことは容易ではなく、持続力にも限りがある。

次の段階で必要になるのが、行政のサポートだ。サンビルに象徴される民間の動きを、岐阜市としての動きにつなげていくことが重要になる。魅力的なコンテンツを集めてまちに若い人たちを呼び、本格的なエリア再生につなげるために、岐阜市は次の展開を模索した。

2018年に新たに国の認定を受けた(3期目)岐阜市中心市街地活性化基本計画に、「エリアの空間需要を喚起し、投資が起こる持続可能なまち」というビジョンが明記された。岐阜市は、「再開発」と「リノベーションまちづくり」を、中心市街地活性化を進めるための両輪と位置づけ、2019年にリノベーションまちづくりを推進する核となる、新たなまちづくりの担い手を育てる「リノベーションスクール@岐阜」を開催した。

リノベーションスクール参加者が得たもの。

ここで簡単に、リノベーションスクールの概要を説明したい。スクールの受講生が取り組むのは、実際の空き店舗や空きビルなどの遊休不動産や地域にある歴史や文化などの資源を題材としたビジネスプランの立案である。ユニットと呼ばれるチーム単位で遊休不動産等の活用プランを立て、不動産オーナーなどの前でプレゼンテーションする。そのためにまず行うのがエリアの調査で、不動産オーナーやまちの人たちの

話を聞き、現地を歩いて課題を把握する。続いて行われるのがプラン立案だ。職業や専門分野の異なる受講生同士がアイデアを出し合い、助言者役であるユニットマスターの指導を受けながら企画を練り上げる。

では、このスクールで実際にどのような案が発表されたのだろうか。2019年の第1回スクールから生まれたのが、傘屋だった建物を中期滞在型の宿泊施設にする「YANAGASE LIVE DIVE」という企画だ。この企画の特徴は、暮らすようにまちを味わうことに加え、岐阜県全域に点在する地域の本質的な魅力愛する人たちをつなぐハブの役割を担っていること。岐阜ローカルの編集拠点と位置づけ、周辺地域とリンクし、柳ヶ瀬の魅力の双方で発信するというアイデアが発表された。

「仲間ができたことが、私にとって一番大きな成果です」



渡辺 眞子さん

一般社団法人 サステナブル・サポート／特定非営利活動法人ぎふNPOセンター。就業・福祉分野における企画立案・マネジメントや、NPO・NGOの伴走支援・事業評価支援に携わる。

「イベントを主催する立場になれるという自信ができました」



大澤 佳絵さん

空間デザイン事務所 intoRAW／タガヤスケープ／テクテクチクリン。建築設計、什器デザイン、イベント装飾を中心としながら、仲間とともに畑や竹林のなかの場づくりを行う。

数日間のスクールを経てメンバー間に生まれるのが、協力して一つのものを作ることによる連帯感だ。実践的なプランをゼロから生み出すことは簡単ではないが、それが難しいからこそ、やり遂げた後の充実感も大きなものになる。リノベーションスクール開催によって、今までとは違った人たちが主体的にまちに関わるようになり、「柳ヶ瀬エリアが変わる」という期待感が高まった。また、実際に新しい事業やプロジェクトを立ち上げる人たちも出てきている。

その中の一つが、2020年の第2回スクールでコンテンツ開発コースという岐阜市独自の試みから生まれた、「みんなの沼 ぎふメディアコヌモノ」というプロジェクトだ。柳ヶ瀬とメディアコスモスをつなぐ非公式分館と

リノベーションまちづくり

リノベーションまちづくりとは…

人口減少時代のこれからのまちづくり手法です。

成長時代のまちづくりを見直し、官民が連携して今ある資源を活かし、新しい使い方でエリアの価値を向上させて、まちを未来へとつなぎます。

Why?

まちづくりの前提が変わってきている

課題

Task

□ 01. 建物・空間があまる

□ 02. つかいたい人が減る

□ 03. 人の価値観の多様化

□ 04. 買い物はロードサイド・ネット通販でもできる

□ 05. どこにでもあるものは選ばれにくくなってきている

How?

あるものを活かして創造的に!!

以下の4つの視点を軸にそのまちにある資源を活かした取り組みです。官民が連携して、まちの課題を解決していきます。

活かす人を育てる

まちづくりはどこかの誰かがやってくれるものではありません。まちを良くしたいという思いをもったあなたに関わってもらいたいです。



当事者



パブリックマインド



コミュニティ& Social Capital

場がもつストーリーを活かす

建物やお店、さらには商売道具や創業ストーリーまでまちに眠っている歴史はたくさんあります。



建物



創業ストーリー



道具



メニュー

エリア視点で考える

敷地に価値なし、エリアに価値あり。通り一本やワンブロックなど小さなエリアの近未来像を描いてみましょう。



Bird's Eye



Small Area



近未来を描く

だれでも参加できる

リノベーションまちづくりは公共も民間も誰でもウェルカム。小さく初めて大きく育てていきましょう。



民間主導行政支援



Small Start



まずやってみる

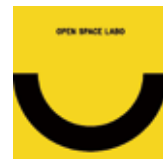
まちに変化を生み出し、エリアの期待値UP

地域の課題解決

次世代にまちをつなぐ

OPEN SPACE LABO IN 金公園

【2020年】



まちなかにある公共空間や空地の新しい使い方を考え、オープンスペースの魅力的な活用を試していくプロジェクト。金公園をフィールドにして、1か月の間に、日常的にテーブルやイス、人工芝やハンモックを設置したくつろぎ空間を創出。キッチンカーやコーヒースタンド、マルシェやスケボーパークなど多様なコンテンツでオープンスペースの使い方を実験。

[POINT]

- オープンスペースを民間視点で活用
- まちづくり担い手の育成・創出
- 日常的な空間の変化の見える化

Story of YANAGASE Area

いう位置づけで、2021年6〜7月の1か月間、「岐路メシ」というイベントを開催した。プロジェクト代表者の一人、渡辺眞子さんは、この取り組みで大きな手応えをつかんだという。

『岐路メシ』は、スクールで考えたアイデアを実現したものです。ゼロから自分たちで新しいものを作っていくというチャレンジを通して、自分の新しい可能性が見えました。そういう取り組みと一緒にできる仲間ができたことが、私にとって一番大きな成果です」

渡辺さんとともに共同代表を務める大澤佳絵さんも、こう続ける。「『岐路メシ』の後も、メディコスで岐路メシからつながる音楽イベントを行いました。私は今までイベントに参加する側でしたが、イベントを主催する立場になれるという自信ができました」

リノベーションスクールに参加した時、大澤さんと渡辺さんはともに、個人事業主としての仕事を始めた時期だったそう。スクールで出会って意気投合したお二人は今、一緒に次のステップに進もうとしている。「柳ヶ瀬の空き店舗を借り、2人の仕事の拠点にすることになりまし

た。1階は『岐路メシ』のような情報発信の場としてイベントやいろんな方の作品の展示などを行い、2階を私たちの仕事場にしようと思っています」

当事者の話から分かるのは、一つひとつの取り組みが人の働き方や生き方に変化を与えているということだ。まちで新しいことを始めた結果、本人すら予想していなかった出来事が起きる。それに刺激を受けた人が、動きに加わる。個人が動き、集まることによって生まれたエネルギーが、まちを少しずつ変えていく。

「OPEN SPACE LABO」を、始まりのきっかけに。

官民連携が着実に進む中、続くステップとして開催されたのが、公共空間や空地などのオープンスペースの活用を目的とした取り組みである。2020年10月からの1か月間、「OPEN SPACE LABO IN 金公園」が開催された。岐阜市が主催するこの社会実験では、民

間のアイデアを柔軟に取り入れながら日常的なオープンスペースの新たな活用方法を検討し、金公園をフィールドとして行われた。

「金公園は元々すごく好きな場所です。ここを上手に使ってたくさんの方が参加できるイベントを行ったら面白いと、以前から思っていました」と話すのが、木方史人さんだ。金公園の近くで「NEW OLD YORK」というショップを営む木方さんは、店主仲間やお客さんと

「若い人が元気なまちであってほしい。そういう思いがあります」



木方 史人さん

古着リメイク品を主に展開するショップ「NEW OLD YORK」を柳ヶ瀬で創業。現在は同店を金宝町で経営する。2020年10月の「OPEN SPACE LABO IN 金公園」では、ナイトマーケット「PEAKS PARK MARKET」を開催した



こどものがっこう

【2021年】



「こどもたちに商店街に来てほしい」、「子どもにまちはどう見えているんだろう?」という思いから始まった商店街を舞台にした学びと工作のワークショップ。名城大学都市情報学部とミユキデザイン、まち会社で企画・運営。

柳ヶ瀬若手大会議

【2019年】

柳ヶ瀬商店街の若手店主などが集まって、商店街の課題解決に取り組むプロジェクト。2019年9月にスタートし計3回開催された。また、2020年4月には20年ぶりに柳ヶ瀬商店街の若手事業者を中心に「柳ヶ瀬商店街青年部」が復活した。



Story of YANAGASE Area

の広いネットワークを持っている。そのつながりを活かし、期間内に「PEAKS PARK MARKET」という若者向けのナイトマーケットを開催した。

「食や洋服、音楽をうまく融合させることができ、お客さんからも出店者さんからもとても良い反応がありました。公園でお祭りのようなイベントを行えば、今までまちのイベントに参加していなかった人を集めることができる。新しい人たちにアプローチする上で、公園は最適な場所だと感じました」

元々、「やながせ倉庫」への出店をきっかけに経営のノウハウを蓄え、現在の店を構えたという木方さん。現在は、自分自身が若い世代のサポートを意識している。

「若い人が『何かをやってみたい』と思っても、きっかけがないとなかなか最初の一步を踏み出せないと思います。だからこのイベントでは、自分のお店を持ちたい人や、面白いことに挑戦している人に声をかけ、出店してもらいました。若い人が元気なまちであってほしい。そういう思いが僕の中にあります」

1か月にわたって開催された「OPEN SPACE LABO IN 金公園」では、その他にもさまざまなイベントが行われ、盛り上がりを見せた。また、会場にはキッチンカーやコーヒースタンドが出店したり、人工芝のある広場やハンモック、スケボーパークが設けられたりと、何度も訪れたくなる空間づくりが行われた。普段の利用者とは違った人たちが公園に集まって、ゆったりとくつろぎ、笑顔になる。そうした新しい日常のシーンが生まれたことは、大きな成果といえるだろう。

柳ヶ瀬を盛り上げる、という社会貢献。

変わり始めた柳ヶ瀬で新たに店を出したのが、「笑喰酒場わらっこNEO柳ヶ瀬」の店主・戸田肇さんだ。

「岐阜市八代に本店があり、そちらは13年目になります。次の店を出す場所として選んだのが柳ヶ瀬です。柳ヶ瀬を盛り上げようとしている人たちの動きに僕のパワーを加えたら、さらに面白いことができると思いました」

「僕のパワーを加えたら、さらに面白いことができると思いました」



戸田 肇さん

(株)わらっこ 代表取締役。岐阜市八代の「笑喰酒場わらっこ やしろみせ」に続き、2021年10月に「笑喰酒場わらっこNEO柳ヶ瀬」をオープン。店の魅力発信を通して柳ヶ瀬商店街を盛り上げる。

2021年10月のオープン時、3日間で500人ものお客さんが訪れたという。「うちはお客様を選ぶ店ではないので、どんな方にも来ていただきたい。間口の広い店でありたい」という言葉通りの客層の広さが、店内を見渡しただけでも分かる。

「この店は、誰もが対等にお酒を酌み交わし、一緒に笑える場所であってほしい。そうやって人と人が深く関わることが、本来の商店街の魅力だと思うんです。楽しい店を続け、柳ヶ瀬を盛り上げることが、僕の社会貢献だと思っています」

戸田さんのように、他のエリアで実績を上げた人が柳ヶ瀬に出店するケースが、近年増えているそう。そう教えてくれたのが、オーダースーツの店「サツキテラー」を営む水野琢朗さん。柳ヶ

「柳ヶ瀬が大きな転換点にある気がします」



水野 琢朗さん

サツキテラー 代表／柳ヶ瀬商店街 青年部長。2016年、オーダースーツの店「サツキテラー」をオープン。「柳ヶ瀬商店街 青年部」を約20年ぶりに復活させるなど、若い店主による商店街活性化に力を注ぐ。

瀬商店街の青年部長を務める水野さんのもとには、商店街での出店を希望する人たちが相談に訪れるという。

「出店のご相談を受けることは、毎月一件くらいあります。コロナ禍でも出店が増え出している今の状況を見ると、柳ヶ瀬が大きな

転換点にある気がします」

水野さんが発起人となって2019年～2020年にかけて3回開かれたのが、「柳ヶ瀬若手大会議」である。この会議では、若手店主らが商店街の今後について意見を交わし、課題解決に取り組んだ。そこで参加者から出たのが、「岐阜市中心市街地活性化空き店舗活用事業」に関する要望だ。この事業では空き店舗への出店時に家賃や初期費用が補助されるが、当初は初期費用の対象が広告宣伝費と印刷製本費、開店イベント費に限られていた。会議で出されたのは、「建物の改装にも費用を使えないか」という要望だ。岐阜市の対応の結果、初期費用の半分(上限)を改装に充てられるようになり、大型の空き店舗や改装コストのかかるスケルトン物件にも出店しやすくなった。

「実際に、何名もの方がこの制度を使って出店しています。この会議や青年部の活動によって、若い店主さんたちが自分たちの意見を伝えやすくなりました。私たちが何かに取り組む姿を見て、『面白そうなことが起きている』と感じた人が柳ヶ瀬に集まってきているのが、今の状況だと思います」

「住む場所」「日常を過ごす場所」としての柳ヶ瀬。

令和に入ってより加速した、柳ヶ瀬エリアの変化。その中でも大きな傾向といえるのが、マンション建設に伴う住民の増加である。2021年2月に「ミトノマチ鍼灸整体院」を開いた品田晃宏さんも、その一人だ。北海道から岐阜市内に移り住み、鍼灸師としての経

「子どもが受け入れられやすいまちという印象です」



品田 晃宏さん

ミトノマチ鍼灸整体院 院長／北海道札幌市出身。大学卒業後、鍼灸師の道へ2021年2月にミトノマチ鍼灸整体院を開院し、家族とともに柳ヶ瀬で暮らす。数多くのスポーツ現場でトレーナー活動をした経験がある。

験を積んだ品田さんは、独立する場所として美殿町を選び、同時期に柳ヶ瀬のマンションに住居を定めた。

「商店街で働く方や、近隣のマンションに住んでいる方に来ていただきたいと思い、この場所に開院しました。仕事場から住まいまでは徒歩数分の距離です。ここは岐阜駅にも出やすく買い物をする店や遊ぶ場所が多くて、とても便利なまちだと思います」

品田さんには、生まれて間もない子どもがいる。同じマンションには品田さんと同じくらいの子を持つ家族も多いそうだ。

「子どもをベビーカーに乗せて商店街を散歩していると、近所のお年寄りがよく話しかけてきてくれます。子どもが受け入れられやすいまちという印象です。今後さらに子どもの数が増えていくと、柳ヶ瀬のイメージが変わるかもしれないですね」

マンションの増加だけでなく、商店街にシェアハウスが誕生して若者が住み始めるなど、最近の柳ヶ瀬は「住む場所」「日常を過ごす場所」としての色合いが強まってきた。新しい住民が増えてきた現状をふまえて柳商連理事長の林亨一さんが挙げるのが、「ネットワーク化」というキーワードだ。

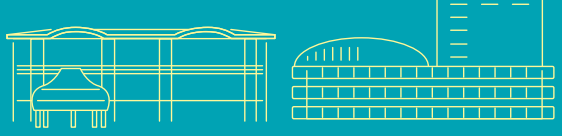
「お店の店主もお客さんも、気づいたらみんなつながっているような、ネットワーク化されたまちであってほしいですね。楽しく快適に暮らすためのコンテンツがそろっているのが、今の柳ヶ瀬です。新しい住民の方たちにも、自然な形でこのまちのネットワークに入っただけだと思います」

プレーヤーが増え、ネットワークが広がり、柳ヶ瀬エリアは確実に元気になってきた。次は何が始まるだろう。そう期待させる何かが、今のこのまちにはある。柳ヶ瀬エリアのリノベーションまちづくりは、冒頭の大前貴裕さんの言葉のように、「成功へのシナリオがない状態」から始まった。しかし、シナリオがないからこそ自由な空気が育まれ、ここにしかない熱気が生まれたのかもしれない。まちの様子をじっくり見つめると、自分自身の変化を楽しむ、「人」の姿が見えてくる。動き始めた柳ヶ瀬エリアのストーリー。その続きが待ち遠しい。

リノベーションまちづくりキャスト

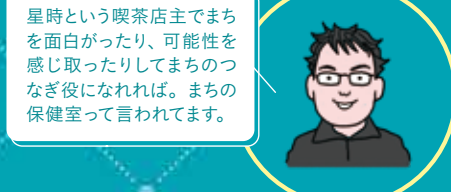
リノベーションスクールをきっかけにまちづくりが広がっています。2019年から3年間に渡り開催されたリノベーションスクール@岐阜。ローカルユニットマスターと受講生の総勢90名が参加し、スクールで得た経験を通じて何かを始めたり、ユニットでの繋がりから人間関係を広げたりと、それぞれが動き始めています。

TSUKASA NO MACHI AREA



篠田 花子さん

教育をテーマに活動しています。岐阜市は子育てにいいまちです。柳ヶ瀬周辺で新しい場所をつくります。



樋口 尚敬さん



野口 大輔さん
後藤 麻衣子さん

美殿町のまちでつくるビルで活動しています。まちとのつながりを考えるいいきっかけになりました。

MITONO AREA



小林 徹さん

敷島町でアパレルショップを経営しています。もちは餅屋という考え方ですがスクールで「自分がやる」スイッチが入り新事業を始めています。



土肥 彩香さん

ふらりと立ち寄った柳ヶ瀬でサンビルに出会いました。大好きなサンビルが、今は仕事になっています。



上田 沙奈さん

古いものに魅力を感じています。最近、父から柳ヶ瀬の古いビルと古道具屋という事業を引き継ぎました。柳ヶ瀬はいいまちだ。



名和 豪敏さん

スクールをきっかけに地元・鏡島でビルを購入しキッチンやショップ、ゲストルームなどを併設したシェアスペースを立ち上げました。



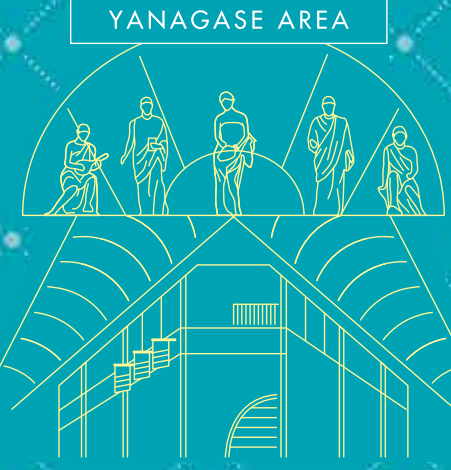
田代 達生さん

地銀に勤務していますが、独自視点でまちを分析したり商店街に関わって事業を支援する仕事をしています。



福富 梢さん

まちに演劇などの文化を根付かせたくて文化屋という活動をしています。柳ヶ瀬育ちでまち会社に就職します！



YANAGASE AREA



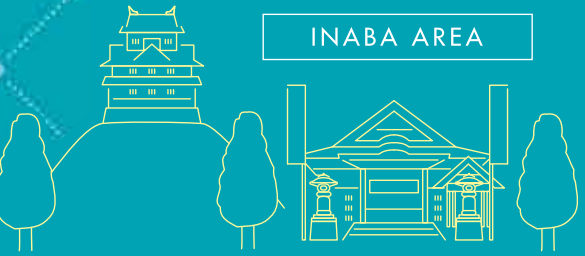
森 美佳さん

柳ヶ瀬まわりで頑張っている知り合いも出て刺激をもらっています。前に、ワイモクマーケットをそんな人たちと一緒に企画・開催しました！



藤谷 幹さん

東京で不動産の仕事をしていましたが、子どもも生まれ、岐阜の良さを改めて感じています。岐阜に帰って家を買いました。



INABA AREA



蒲 勇介さん

ひとりではなくチームで事業をつくる経験は久しぶりで刺激になり、ついに仲間と岐阜町でまちづくり会社を立ち上げました。



河合 ほのかさん

人の顔がみえるイベントが大好きで、OSLやサンビルのボランティアもしています。まちの楽しさをみんなと共有したいな。



河口 郁美さん

和傘を中心に長良川の文化を守り、伝え、引き継ぐ仕事をしています。初めて出会う人たちがチームになっていくのは面白いです。

KAWARAMACHI AREA



山田 幸長さん

学生で参加し、もっと自分に力をつけたいと上京し修行中です。パワーアップして帰ってきます！



百瀬 友博さん

飲食の力で岐阜を面白くしたいという気持ちが強くなって、コロナ禍に駅前に新店舗を出しました。自分のやれることをやります。



加藤 誉使子さん

ロイヤル40でギャラリーを開き、美殿町にもスタジオをもちました。アートの力でまちを豊かにできるといいな。

Story of YANAGASE Area

リノベーションスクール@岐阜の スクールマスター、青木純さんに インタビューしました！



青木 純さん

(株)リノベリング パートナー (株)nest 代表取締役、(株)まめくらし 代表取締役、(株)都電家守舎 代表取締役
生まれ育った東京・池袋や都電荒川線のまちを舞台にリノベーションまちづくりやウォークアブル事業を実践。南池袋公園・グリーン大通りを舞台に2017年から取組む『IKEBUKURO LIVING LOOP』ではイベントや実験からハード整備につなげ、新たなまちの個性となる「まちなかりビングのある日常」の風景を地元企業と共創している。「大家の学校」主宰。2021年より国土交通省『「ひと」と「くらし」の未来研究会』コアアドバイザー。

ー岐阜市でリノベーションスクールを開催した感想を教えてください。

ひとことで答えると、「濃い！」です。スクールに関わった人の個性や関係性が、圧倒的に濃いと感じたのが岐阜市でした。僕が関わってきた都市の中でも一番じゃないかと思うくらい、会場の高揚感や熱気を感じました。そのベースとしてサンデービルディングマーケットが行われていたことが大きいと思います。すでに柳ヶ瀬を舞台に活動している人たちがいて、多くの人が地域に期待を持っていました。熱い思いを持った人がスクール場で集まって、化学反応が起きたのだと思います。

ースクール開催後、岐阜市にどんな変化を感じていますか？

一番大きな変化は、人と人との結びつきが生まれたことだと思います。スクールの受講者や事前講演を聞いた人など、何らかの形でスクールとつながった人たちが連携し、アクションを起こしています。そしてそのつながりは、今後も続いていくものです。仮に一つのプロジェクトが終わったとしても、関わったメンバーが同じ思いを持ち続けて、次の活動に活かす。また、その経験を自分の仕事に活かし、新しい取り組みを始めることに価値があると思います。たとえば、2020年の第2回スクールでローカルユニットマスターを務めた小林徹君は、飲食店のプロデュースや自社でベーカリーをオープンするという新しい活動を始めました。彼は、「スクールに参加したことによって意識が変わり、自分にできることが見えた」と言ってくれています。そういう声を聞くと、スクール開催の意味があったと思います。

ー岐阜市のリノベーションまちづくりの現状をどうとらえていますか？

いろんなことがうごめき始めたな、という感じがします。岐阜市では今、リノベーションまちづくりと再開発が同時進行で起きていますよね。リノベーションまちづくりの動きがベースにあったから地域の期待値が高まり、再開発の投資につながっているのだと思います。また再開発の結果、新たな住民が柳ヶ瀬エリアで暮らし始めています。そういう人たちがまちに興味を持って何かを始めようと思った時、すでに活動している人たちのネットワークがあるのも大きいですね。今後がさらに楽しみになってきたと思います。

ー今後岐阜の人たちに期待することはありますか？

一番言いたいのは、「それぞれの暮らしにもう一度向き合ってほしい」ということです。コロナ禍によって、身近な人との関係性や自分が暮らすまちとの関係性を、多くの人が考えたと思います。そこで気づいた新たな価値観に向き合ってもらえたらと思います。リノベーションまちづくりは単なる建築行為ではなく、考え方や発想をリノベーションすることに重きを置いた活動です。だからそこに関わってきた人々には、活動を通して感じたことに向き合ってほしいし、自分にできることの可能性を信じてほしいと思います。「リノベーションまちづくり」という言葉を聞いて、ハードルの高さを感じてしまう人もいるかもしれませんが。だからもう少し気軽に、「未来の暮らしづくり」くらいに考えたらいいんじゃないかと、最近思っています。自分のまちに対する思いを持ち、未来の暮らしに向き合い続けることが、この活動で生まれたものを長く育てることにつながると思います。



リノベーションまちづくり座談会

必要な時に必要な人が集まる。

—この座談会では、リノベーションまちづくりにおける官民連携をテーマの一つにしたいと思います。岐阜市職員である河合さんと、「岐阜市にぎわいまち公社（以下、公社）」の白橋さんはどんな形で関わってきましたか？

■河合：柳ヶ瀬商店街との関わりの始まりは、「商工観光部（現：経済部）」に配属された2012年頃からです。柳ヶ瀬の商店街振興に約4年関わり、白橋さんとはその頃からの付き合いです。ただ、その頃はあくまでも組織の一員として関わっている感じでした。個人的に関わるようになったのは、その後「まちづくり推進部」に異動になり、中心市街地活性化に取り組むようになってからだと思います。

■白橋：よく覚えているのは、僕が夜遅い時間に市庁舎に乗り込んでいって、河合さんと何時間もまちづくりのあり方について議論したことです。あの頃から踏み込んだ関わりを持つようになった気がします。

■河合：白橋さんが勤務する公社の方々は、市民をはじめ柳ヶ瀬に関わりたいと思う人たちが「まちで何かを起こしたい」という時の手助けをされています。たとえば市民の方が何かを始めたいと思ったとして、それを直接行政に伝えることに、ハードルの高さを感じられることもある。そういう時に柳ヶ瀬での長年の活動実績と商店街との信頼関係がある公社さんが間に入ってくださると、前進することがあります。

■白橋：市民や民間の人たちが何かをやりたいと思って、行政の立場として「それはできません」と言わなくてはならないこともありますからね。そういう時に僕たちが、「行政ができない理由はこういうことなんですよ」と少し整理して説明したりします。逆に、行政に対して「民間の方が言っているのはこういうことですよ」と言うこともできます。民間と行政の間に壁ができそうな時に、それをゆるやかにする役割を果たしているのが公社だと思います。

■出村：2012年頃に、柳ヶ瀬を対象にした課題を学生に出したのが最初です。その後「もっとまちに出たい」と思い、古いビルを改装して「岐阜大学 美殿町ラボ」を作ることにしました。その時に考えたのは、せっかくだからいろんな人を巻き込んでDIYで作ろうということです。まちの人たちも興味を持ってきて人のつながりができ、とても楽しい時間を過ごしました。また、「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社（以下、まち会社）」の立ち上げに誘っていたいで役員になるなど、どんどん関わりが加速しました。

■白橋：今では出村先生は完全に「まちの人」ですもんね。

■出村：自分自身が中に入って楽しい経験を持たないと、まちのことは分からない。そういうことが分かりました。大きな転機でした。

■河合：出村先生が柳ヶ瀬に来られてアドバイスをくださるようになったことが、すごく大きかったと思います。私たちの部署や公社さん、商店街の方などがまちの将来を考える時に、出村先生とのつながりを持てたことが強みになりました。多様な人が集まり、それが“チーム”として機能していったことが、柳ヶ瀬の変化につながっていったと思います。

■白橋：そうですね。僕らが今取り組んでいる官民連携やまちづくりは、形の決まった組織で動くというより、必要な時に必要な人が集まってチームになっている感じです。次に別のことをする時は、また違うメンバーがそこにつながってコミュニティになる。そういう動きが生まれ出したと当時感じました。

■河合：そのチームに行政がどう関わるかについては、当時の部下がフットワーク良くまちのつながりに入ってくれました。私はその動きをサポートする役割を意識しました。

■白橋：民間の人たちのやりたいことを職員の方が理解してくれて、それを聞いた河合さんが市役所の中でさらに共有してくれたと思います。民間から行政の内部まで、いろんな人の通訳を経て情報がしっかり伝わったことが、良かった点だと思います。

責任を持ってコトを起こせる人を育てたい。

—出村先生が指導する学生の皆さんも、リノベーションスクールの運営をサポートするなど、そういう輪に積極的に入っているように感じます。

■出村：そうだと思います。人のネットワークがつながっている。しかも組織の壁を越えてシームレスにつながっている例は、かなり珍しいと思います。岐阜市のリノベーションまちづくりの特徴は、関わる人がピラミッド型ではなく平面的につながっている



出村 嘉史さん
岐阜大学 社会システム経営学環教授／都市・景観研究室のまちなカラボ「岐阜大学美殿町ラボ」を、2016年5月に開設。

白橋 利明さん
一般財団法人岐阜市にぎわいまち公社 まちづくり推進課主幹兼まちづくり支援係長

河合 博史さん
岐阜市まちづくり推進部まちづくり推進政策課 政策係長(当時)現在はぎふ魅力づくり推進政策課に所属

こと。そして、みんな自分の専門分野があり、自立した活動ができる力を持っていることです。そういう人がつながって主要な役割を担うから、面白いことが起きます。

■白橋：「組織の建前で話す」のではなく、それぞれの個人の価値観や考え方を前提とした判断をし、それぞれが組織の中で役割を果たすことで上手につながっている感じですね。だから平面的なつながりになっているのだと思います。

だから、面白いことが起きるんだ。

■出村：今はコロナ禍でなかなか難しいですが、以前はどんな場にも学生を巻き込むようにしていました。その中で学生たちは、「こうやってまちの中に入っていけばいいんだ」ということを覚えていたと思います。起業するにしても何かコトを起こすにしても、「すべ

社会人や学生を対象にしたスクールを開き、枠組みを越えた協働を学ぶ場を作りたいです。

あの経験がなければ、今の自分はなかった。

—河合さんはリノベーションまちづくりに関わる中で変化がありましたか？

■河合：最初は自分を知ってもらおうと、商店街の皆さんやまちづくりに関わる皆さんと良好な関係を築くために、何度も柳ヶ瀬に足を運んだことを覚えています。当時はすごく苦労したのですが、少しずつ人との関わりが生まれ、まちを担う人たちを後押しできる信頼関係ができていきました。あの時の経験がなければ、今の自分はなかったと思います。

—当時の経験が今の仕事にどう生きていますか？

■河合：私は今、観光と文化、スポーツの振興を所掌する「ぎふ魅力づくり推進部」で、業務の一つの「ぎふ・長良川鵜飼かわまちづくり計画」に携わっています。公民連携によって長良川の魅力的な水辺空間を創出しエリア全体の価値を高めることが目的ですが、地域住民や長良川で活動する人たちの考えを計画に盛り込むことを大切にしていたかったので、民間の人たちがやりたいと思うことを吸い上げて整理し、庁内関係部局と連携して合意形成を図っていきました。まちづくり推進部でリノベーションまちづくりの業務に携わったことが、今の業務に生きています。

■白橋：まちで課題を感じて動き出している民間の人たちとチームを組んで、その人たちの声をしっかり聴き、行政にできることを考え、実行する。そういう思考に変わったということですね。

■出村：すごく大事なことです。■白橋：2018年に3期目の岐阜市中心市街地活性化基本計画を策定する際も、その流れがあったと思います。計画を作るにあたって僕らや商店街の人など民間の人たちの意見を事前に聴いてくださいましたよね。

■河合：はい。商店街、まち会社など民間の方々の考えを聴き、それを白橋さんたちに通訳してもらって、計画にその考えを盛り込むことができました。民間の方々に「自分たちの思いがこの計画に入っている」と思ってもらうことが、計画の実行性を高める上ですごく大事なことです。「かわまちづくり計画」でも同様なんですよ。

■出村：河合さんが言われた行政の役割は、「大家」にたとえられると思います。建物を改装する際、大家さんの好きなように改装しても入居者が来なかったりします。だけど、入居する人に「どこをどう直すか」を選んでもらってそれをサポートすれば、入居者自身が作り上げる過程を楽しむことができます。その大事さに気づいている、新しいタイプの大家さん。行政の視点だけではなく、ユーザー側（民間）がどうしたいかを聴き、その思いが実現するように、行政でできることをサポートする。そういうスタンスを持っているのが今の河合さんだと感じました。

—では最後に、今後の岐阜市のまちづくりはどうあればいいと思いますか？

■白橋：大きな視点で言うと、今まで以上に地域一丸となって、官民が連携して動いていくことが大切だと思います。

■出村：そのために、人のつながりによるネットワークを意識できるようになって欲しいです。新しいことを始めるときに、「人」を視野に入れば、「誰が何をするか」が明確になりネットワークの展開がイメージしやすくなると思います。その兆しは見えているので、どんどん広げてほしいと思います。

■白橋：今日お二人とお話しして、岐阜市のリノベーションまちづくりを改めて振り返ることができました。数十年後に「あの時が転機だった」と言えるような大きな変化が、この岐阜市で生まれていると思います。

R E V I T A L I Z A T I O N t h r o u g h R E N O V A T I O N : C R O S S T A L K

柳ヶ瀬におけるリノベーションまちづくり 01

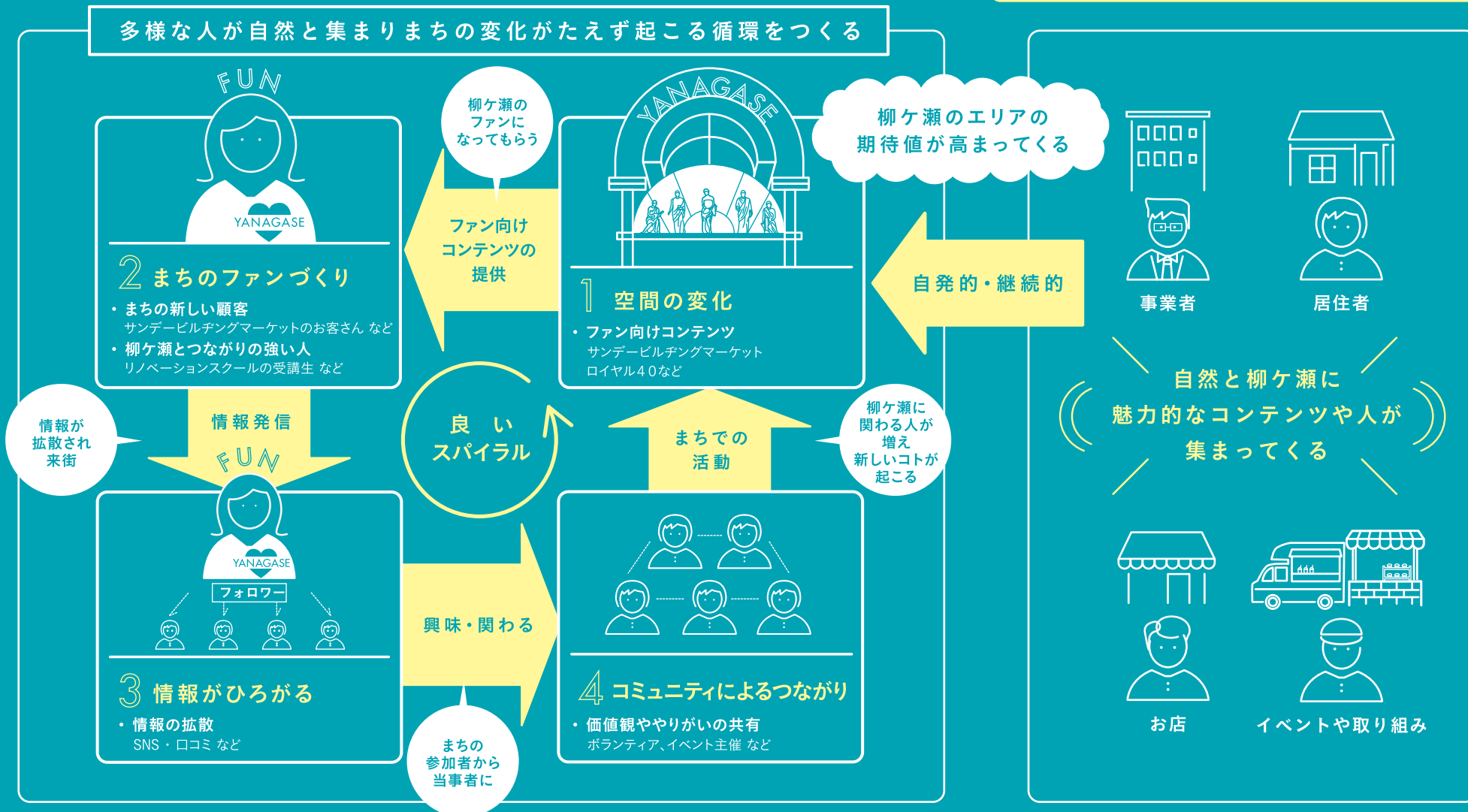
柳ヶ瀬の変化のプロセスの例

2014年からスタートした柳ヶ瀬のリノベーションまちづくり。柳ヶ瀬のまちとはどのようなプロセスで変化してきたのでしょうか。

持続可能なまちへ！次世代にまちをつないでいく。

「人がつながる 創造が生まれる しなやかさのあるまち」へ

- オール岐阜のまちづくり
- DXと脱炭素化
- シビックプライドの醸成
- 持続可能で選ばれるまち



柳ヶ瀬におけるリノベーションまちづくり 02

柳ヶ瀬におけるリノベーションまちづくりでは、持続可能なまちを目指して「柳ヶ瀬のエリアの期待値の向上」に取り組んでいます。まちが変わっていく未来をみなさんが感じ、期待してもらうため、4つの要素を意識して様々な取り組みを実施してきました。

